

書誌から見た戦後のワイルド受容研究

——山田勝を中心に——

佐々木 隆

プロローグ

戦後の日本におけるワイルド研究上、注目しなければならない研究者は沢山いるが、その中のひとりが山田勝（1942-2004）である。山田勝は日本ワイルド協会の会長として、平成9年（1997）10月には世界初のワイルド専門事典、『オスカー・ワイルド事典』（北星堂書店）を世に送り出した功績は忘れることができない。ここでは、山田勝のワイルド研究を日本ワイルド研究全体の中での位置付けを試みたい。

1 ダンディズム

山田勝の研究領域で注目しておきたいのは、ダンディズムに関する研究である。まず、ダンディズム、イギリス紳士に関する山田の著書を時系列で紹介しておくのと以下の通りである。

『世紀末とダンディズム』（創元社、昭和56年4月）

『ダンディズム』（日本放送出版協会、平成1年9月）

『回想のベル・エポック』（日本放送出版協会、平成2年11月）

『孤高のダンディズム』（早川書房、平成3年5月）

『決闘の社会文化史』（北星堂書店、平成4年6月）

『イギリス人の表と裏』（日本放送出版協会、平成4年11月）

『ドゥミモンドース』（早川書房、平成6年6月）

『ブランメル閣下の華麗なダンディ術』（展望社、平成13年4月）

『イギリス紳士の幕末』（日本放送出版協会、平成16年8月）

山田の定義した「ダンディズム」とは何であったか、そして次にこの「ダンディズムとワイルド」をどう結びつけていたのかを山田の著書『世紀末とダンディズム』を中心に探ってみることにする。

『世紀末とダンディズム』のおもな内容は以下の通りである。

- 第 1 章 異邦人としてのワイルドの生涯
- 第 2 章 夢見る女——『サロメ』
- 第 3 章 バンベリーはダンディーか——『まじめ第一』
- 第 4 章 背徳者の勝利——『何でもない女』
- 第 5 章 過去の罪とは何か——『理想の夫』『ウィンダミア夫人の扇』
- 第 6 章 ピクチュアレスクネス——『ドリアン・グレイの肖像画』(一)
- 第 7 章 世紀末における墮落——『ドリアン・グレイの肖像画』(二)
- 第 8 章 頹廃と色彩——『ドリアン・グレイの肖像画』(三)
- 第 9 章 二重人格と鏡——『ジキル博士とハイド氏』
- 第 10 章 多重人格と肖像画——『ドリアン・グレイの肖像画』(四)
- 第 11 章 手相と宿命——『アーサー・サヴィル卿の犯罪』
- 第 12 章 老衰したダンディー——『カンタヴィルの幽霊』
- 第 13 章 仮面からの誘惑——『秘密のないスフィンクス』
『模範的な百万長者』
- 第 14 章 永遠の愛——『童話』
- 第 15 章 ダンディズムとは何か

特に「第 15 章 ダンディズムとは何か」より、山田の考える「ダンディズム」とそれがどうワイルド研究と結びつくのかを探ってみたい。

山田はボードレールの『現代生活の画家』を引用しているが、ダンディとは単に金持ちで、ひまがあるといった単純なものではない。

彼等が物質によって創りあげる生活の完成は、彼等の精神の崇高性を証明するための象徴的手段にほかならない。ダンディの心の奥底には、自分の生きている社会への不満と反逆、それに、その時代の人々に対する軽蔑の念が常に存在する。しかし、彼等は一般の社会改革論者のように、世の中を「民主化」すうことを考えるどころか、逆行させることをむしろ願っている。⁽¹⁾

山田はダンディとワイルドについては次のように述べている。

世紀末ダンディの主役は何と云っても、エレンガスの価値と民主主義の悪弊を本質的に理解し、その悪弊を助長させた「体制的道德」への反逆者たちである。イギリスのワイルドをはじめ、ビアズリー、スウィンバーン、ダウスン、そしてフランスではユイスマンをはじめブルージェ、ジャン・ロラン、ユーク・ルベル、モンテスキュー伯、ジョルジュ・ダリアンなどはその代表的な人物である。⁽²⁾

ワイルドのダンディズムについては次のように述べている。

ワイルドが「芸術生活は長く、そして美しい自殺行為であ

る」と言う時、まさにそれは、ダンディズムの抵抗のはかなさを意識した言葉であった。彼等の行為そのものも破滅を前提としたようなものであり、まさに「崩壊の美」、「落日の雄大さ」を匂わせるものである。ワイルドのダンディズムはフランスのそれとちがって、十九世紀の末期の開花したところに大きな意義があると言える。俗悪な二〇世紀を迎えようとするヨーロッパに、時間をとめようとする狼の叫びにも似ている。⁽³⁾

ワイルドのダンディズムは獄中生活によりその深みを増したことになる。そこには「偽善的な生き方しかできない人々を許すことができなかった」⁽⁴⁾ワイルドを浮き彫りにしたのが、投獄と破滅ということになる。また、ワイルドは「精神の貴族性」⁽⁵⁾を求めたとも山田は後年記している。山田は『孤高のダンディズム』の中でダンディたちの姿勢について次のように述べている。

ダンディたちは、ヴィクトリア時代的美徳のすべてを「致命的」と決めつけるようになった。キリスト教の教える「七大美徳」‘seven cardinal virtues’が、彼の生活面において、ヴィクトリア紳士の美徳とされている律義、規則正しさ、コモン・センス、健全性などを否定し、不義理、不規則、反常識、病的姿勢を採用してまで、既成のすべての美徳に挑戦したのだ。⁽⁶⁾

山田は「オスカー・ワイルドの作品は、ダンディーとしての生活の表現の一つであった」⁽⁷⁾と指摘した。

2 ワイルド研究論文

日本ワイルド協会第6代会長を務めた山田勝は、ワイルドに関する論文を多数発表した。ここでは日本ワイルド協会が設立された昭和50年以前の論文だけをざっと見ても以下の通りである。

「オスカー・ワイルド研究——同性愛とその真相——」（『研究紀要』第9号、松蔭女子学院大学・松蔭短期大学学術研究会、1967年12月）

「オスカー・ワイルド研究——唯美主義と社会性の問題」（『Shoin Literary Review』第2号、松蔭女子学院大学・松蔭短期大学学術研究会、1969年3月）

「オスカー・ワイルドにおける yellow の意味」（『Shoin Literary Review』第3号、松蔭女子学院大学・松蔭短期大学学術研究会、1969年12月）

「オスカー・ワイルドにおける色彩の研究——3—— Green の意味」（『Shoin Literary Review』第4号、松蔭女子学院大学・松蔭短期大学学術研究会、1970年12月）

「オスカー・ワイルドの風俗喜劇」（『Shoin Literary Review』第5号、松蔭女子学院大学・松蔭短期大学学術研究会、1971年12月）

「オスカー・ワイルドとニーチェ」（『神戸外大論叢』第23巻第5・6号、神戸市外国語大学研究所、1973年1月）

「教育者としてのオスカー・ワイルド」（『神戸外大論叢』第24巻第6号、神戸市外国語大学研究所、1973年12月）

さらに、ワイルド研究書については以下の通りである。

『世紀末とダンディズム』（創元社、1986年4月）

『オスカー・ワイルド事典』（北星堂書店、1997年10月）

『オスカー・ワイルドの生涯』（日本放送出版、1999年11月）

ここでは山田の初期のワイルド研究論文「オスカー・ワイルドとニーチェ」（1973）と「教育者としてのオスカー・ワイルド」（1973）を見てみよう。

「オスカー・ワイルドとニーチェ」（1973）の中で山田は次のように述べている。

ニーチェは徹底的にキリスト教を攻撃し、ワイルドはそれと結びついたブルジョア道徳を攻撃した。そしてニーチェはキリストに変わる人類の指導者たるべき「超人」を求めたのに対し、ワイルドは芸術上の「善（美）」を追求した。しかし根本は同一なのである。⁽⁸⁾

山田はさらに続けている。

キリスト教は、人間の情熱、感官、快楽、自己愛等の「生の本能」を悪又は罪と呼んで来た。従ってニーチェは積極的にこれらの価値を評価を評価し、いわゆる「悪」を彼の「美德」としていった。その結果、情熱の発散、肉体の重視、快楽の追求だけにとどまらず、戦い、勝利、支配欲、憎しみ、軽蔑までを人間の生育に必要なものとした。ここにもニーチェの出張と、ワイルドらの世紀末芸術家の理想が一致してくるのである。⁽⁹⁾

山田は最後、以下のように結んでいる。

ニーチェの敵はキリスト教という極めて抽象的なものであつ

たのに対し、ワイルドの敵はキリスト教と結びついたブルジョア社会道徳という卑俗な現実であったこともこうした結果を生み出したのかもしれない。しかし、彼等二人の主張はこれまで述べてきた通り、根源的には完全に一致しているのであり、彼等の破壊精神と、それから生じた新しい創造への動きは、19世紀末のヨーロッパに漂い始めた。ある大になる流れ、新しい世紀への動きを敏感にとらえていたのである。ワイルドとニーチェには個人的つながり、又は思想的影響を証明する具体的事実は何もない。しかし、これら二人の巨人は世紀末という流れの中に同一ものを感じ取っていたのである。

(10)

ニーチェ (Friedrich Wilhel Nietzsche, 1844-1900) はワイルドと同時代人であり、同年に亡くなっている。カール・ベクソン (Karl Beckson, b. 1926) による *The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998) には “Nietzsche” の項目はなく、また、General Index にもその項目はない。一方、山田勝編／日本ワイルド協力協力『オスカー・ワイルド事典』(北星堂書店、1997年10月) にも「ニーチェ」の項目はないが、索引に「ニーチェ」を見出すことができる。特に井村君江「佐藤春夫」では次のように述べている。

ワイルドとダヌンツィオは退廃、耽美派であり、その根底にニーチェの哲学である。(11)

本間久雄 (1886-1981) や佐藤春夫 (1892-1964) がニーチェへの言及を行っているが、山田はさらに分析を続けている。

「教育者としてのオスカー・ワイルド」(1973) の中でヴィクトリア朝期の時代観や世相観を通して山田は次のように述べている。

経済成長を中心とした物質文明社会においては、必然的に厳しい生存競争を余儀なくされる。物質的に豊かな生活を営み、社会的地位を得るには、知識・学問の詰め込み的な吸収が必要となってくる。ワイルドはこのような社会現象を皮肉っている。例えば、次のような引用を示している。

1. It is sad thing to think of, but there is no doubt that Genius lasts longer than Beauty. That accounts for the fact that we all take such pains to over-educate ourselves. In the wild struggle for existence, we want to have something that endures, and so we fill our minds with rubbish and facts, in the silly hope of keeping our place. The thoroughly well-informed man—that is the modern ideal. And the mind of the thoroughly well-informed man is a dreadful thing. —*The Picture of Dorian Gray*, Chap. I—⁽¹²⁾

山田はワイルドの憂いが「童話」の中に象徴的に表れているという。

The Nightingale and the Rose. では、命を犠牲にしてさえも、苦学生を恋を成就させようとしたナイチンゲールの純粋な気持を全く理解しなかった学問一途の学生の性格的欠陥を、物質中心の社会への非難以上に、皮肉っている。⁽¹³⁾

山田は更に続けている。

ワイルドの不道德行為や罪の美化という偽悪思想には、ブルジョワと結びついたキリスト教道徳（ピューリタニズムから生まれた一種の教育概念）から離脱して、人間が本来持つべき、愛と普遍的モラルが浮き彫りにされている。彼の小説や劇に見られる背徳の裏に隠された真の人間のあり方が、今述べた「童話」の世界に象徴的に再現されているわけである。

(14)

山田が次にアメリカ講演、*The Soul of Man under Socialism* に注目し、次のように纏めている。

彼の意見は芸術家として空想が常に付き纏っており、美の追求に力を置いているけれども、単に芸術の新しい波を感知し、それを発展させていった唯美主義者としてだけではなく、教育者として、社会改革論者として、人間の存在価値の低下した世紀末の英国に敢然と挑んでいった姿は十分評価してよい。

(15)

山田は作品だけでなく、ダンディズムをはじめ、時代状況を踏まえて研究を行っている。

3 山田勝編『オスカー・ワイルド事典』

平成9年(1997)に世界最初のワイルド事典として山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典—世紀末イギリス大百科—』(北星堂書店)が出版された。編集委員長に日本ワイルド協会第6代会長の山田勝。編集顧問には、同協会名誉顧問の西村孝次とワイルドの孫、マーリン・ホランド。編集委員は12名で構成され、中でも同協会会長歴任者の川崎淳之助、井村君江、荒井良雄を

はじめ、青柳晃一、石崎等、河村錠一郎といったメンバーを加え、元日本英文学会会長の富士川義之も編集委員に加わっていた。

内容は、「第1部 オスカー・ワイルド事典」「第2部 オスカー・ワイルドと日本」「第3部 オスカー・ワイルド作品事典」「第4部 オスカー・ワイルド周辺小事典」「第5部 オスカー・ワイルド作品登場人物小事典」「第6部 オスカー・ワイルド書誌」「第7部 世紀末文化年表」の7部門に分かれている。

「第1部 オスカー・ワイルド事典」では副題の「イギリス世紀末大百科」の表題通り、ワイルドの周辺だけでなく、イギリス文化史全体を扱っている。例えば、「アスコット競馬」「アンブレラ」「応接間」「オーバーコート」「カフェ・ロワイヤル」「ギャンブル」「クラブ」「コンサーバトリー」「食べ物」「飲み物」「馬車」「ボタンホール」「マナーハウス」「ロンドン社交季節」なども項目として取り上げられている。「オスカー・ワイルドと日本」は、まさに日本ならではの項目である。日本におけるワイルド受容史、研究史、翻訳史が明らかにされている。さらに、日本文学への影響も論じられている。特に日本で最初の美学講座を担当した「大塚保治」の項目を設けたことは大きな特徴だろう。「第3部 オスカー・ワイルド作品事典」、「第4部 オスカー・ワイルド周辺小事典」、「第5部 オスカー・ワイルド作品登場人物小事典」はコンパクトにまとめられ、ワイルドの作品や交友関係の理解をする上でよい参考となろう。「第6部 オスカー・ワイルド書誌」と「第7部 世紀末文化年表」は資料としての価値を重視した部門である。書誌や年表を単に付録的扱いとせず、一部門として扱ったことも、「事典」の大きな特徴となっている。

山田は「編集後記」の中で次のように述べている。

ワイルドの演劇や小説を読む時、分かっているようで実は

分からない部分が多かった。執事（バトラー）なる者がよく登場するが、その本来の職務を完全に知らなければ確実に読めたことにはならない。また、イギリス貴族の住居や社交界のしきたり、階級制度、19世紀末の社会状況とその変貌や価値観についても把握しなくてはならない。食生活や衣裳から芸術運動の変遷、さらにワイルドの交友関係など。⁽¹⁶⁾

山田は本事典の中で「ダンディズム」の項目を担当し、その中で次ように述べている。

ワイルドの言う「ダンディ自身が一流の芸術作品」であることは目に見えている。彼らは「瞬間の輝き」を求めて、激烈なる自己主張を演出していたのである。⁽¹⁷⁾

こうした背景には次のようなライフスタイルが凝縮されていたのである。

美的生活の創出、時代の流れへの静かなる抵抗、非生産性、自然（イギリス人常識につながる）の否定という言わば<デカダンス>を背負って行動を起こしていた。⁽¹⁸⁾

山田はワイルドが求めたダンディズムについては結局、「精神の貴族性」⁽¹⁹⁾であると結論付けた。日本におけるダンディズムの研究も今後さらに期待したものだ。

『オスカー・ワイルド事典』の大きな意義は、世界最初のワイルドであること、さらに、日本というアイデンティティを持った事典であるということだ。

エピローグ

山田は日本ワイルド協会設立以前からワイルド研究に取り組んでいた。1996年（平成8）の役員改選により第6代会長として就任した。

山田のワイルド研究は、これまでの日本におけるワイルド研究においてもワイルドのダンディーに注目していたものはあまりなかったが、山田のワイルド研究はこうしたダンディズムに注目した研究で大いに貢献したことになる。ワイルド研究は、作品研究はもちろんだが、時代背景等の研究を無視することはできない。ワイルド研究が多様化している中、山田のような研究方法が今後求められるのだ。

注

- (1) 山田勝『世紀末とダンディズム』（創元社、1981年4月）、p. 265.
- (2) 山田勝『回想とベル・エポック』（日本放送出版協会、1980年11月）、p. 127.
- (3) 山田勝『世紀末とダンディズム』、 p. 266.
- (4) Ibid., p. 272.
- (5) 山田勝「ダンディズム」（『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月）、p. 233.
- (6) 山田勝『孤高のダンディズム』（早川書房、1991年5月）、p. 136.
- (7) 山田勝『世紀末とダンディズム』、p. 267.
- (8) 山田勝「オスカー・ワイルドとニーチェ」（『神戸外大論叢』第23巻第5・6号、神戸市外国語大学研究所、1973年1月）、p. 58.
- (9) Ibid., p. 59.
- (10) Ibid., p. 61.

- (11) 井村君江「佐藤春夫」(山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月), p. 533.
- (12) 山田勝「教育者としてのオスカー・ワイルド」(『神戸外大論叢』第24巻第6号、神戸市外国語大学研究所、1973年12月), pp. 38-39.
- (13) Ibid., p. 40.
- (14) Ibid., p. 41.
- (15) Ibid., p. 48.
- (16) 山田勝「編集後記」(山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月), p. 681.
- (17) 山田勝「ダンディズム」(『オスカー・ワイルド事典』), p. 233.
- (18) Ditto.
- (19) Ditto.

キーワード : ワイルド、ダンディズム、イギリス貴族、山田勝